『中央学術研究所紀要』第44号抜刷
平成27年11月15日発行

梵文「法華経」における *upāyakauśalya* の意義

―第２章 Upāyakauśalya を中心として―

西　　康　友

梵文「法華経」における *upāyakauśalya* の意義

―第２章 Upāyakauśalya を中心として―

西　　康友

1　はじめに
2　Saddhp II 章における *upāyakauśalya* の用例
2.1　如来たちが担う（べき）属性
2.2　具体的な形態
2.3 「ことば」によって法を説き・明らにする機能・手法
3　*saṃdhābhāṣya* と *upāyakauśalya* との関係
4　おわりに

1　はじめに[1]

周知のように、『法華経』は初期大乗経典を代表する経典の一つである。仏教史上のみならず、特に東アジア宗教・文化史上に極めて大きな位置を占めており、これに応じて『法華経』研究の成果も膨大にある。

『法華経』における中核的な位置を占める概念のひとつ「方便」「善巧方便」についても同様に研究が蓄積されている[2]。そうした研究の多くは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に依拠しており、さらには天台智顗をはじめとする注釈者たちの見解に大きな影響を受けている。

言うまでもなく、漢訳『法華経』である『妙法蓮華経』は翻訳文献である。その思想の実相に迫るには原文（梵文「法華経」：*Saddharmapuṇḍarīka*, Saddhp）を精査する必要がある[3]。こうした観点で特に Saddhp における *upāyakauśalya*[4]「善巧方便」の様相を確かめようとする先行研究がいくつかあるが、なお検討の余地があると思われる[5]。

1　本稿は第21回国際宗教学宗教史会議世界大会（XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions, August 23–29, 2015, Erfurt）のパネル「巧みな方便－インド・東アジアの仏教における発展」（Skilful Means: Developments in Indian and East Asian Buddhism）での発表原稿（西康友「法華経における方便」（On the Skilful Means in *Saddharmapuṇḍarīka*））を加筆・修正し論文にしたものである。発表要旨は http://www.iahr2015.org/iahr/1900.html を参照。

2　例えば日下［1985］。

本稿は Saddhp の標準テキスト KN（『ケルン・南條校訂本』）を用いて Saddhp の *upāyakauśalya* の出典箇所を精査し、Saddhp で *upāyakauśalya* が如何なる意義を担ったかを瞥見する。その範囲は主として Saddhap II 章とする。それは以下の理由による：1）Saddhp 全章を通じて *upāyakauśalya* [*°kauśala* / *°kuśala*] の用例は77あるが、うち24例が II 章に偏在する；2）II 章は Upāyakauśalya の名を持ち、*upāyakauśalya* を主題的に取り扱っていると解釈できる。さらに3）Saddhp II は最古層に属すると考えられている[6]。恐らくSaddhp成立初期に、*upāyakauśalya*は一章をささげて論じるべき重要概念・機能の一つを果たしたものだろう。本稿の他の箇所にも *upāyakauśalya* は散見されるが、II 章にこそ Saddhp における *upāyakauśalya* の原型が観察できるであろう。それは、衆生に仏智を得さしめるべく試みられる個々の発話、ことばたちであって、自ずとその状況に応じた限界を持つ。しかし個々の状況に制限づけられたという意味で対機説法ではあるが、諸々の単語・文は普遍的な仏智を理解させるべく、ある構成の中に配置されて説かれるだろう。この適切な構成をなす発話行為こそが *saṃdhābhāṣya-* であると考えられる。

２　Saddhp II 章における *upāyakauśalya* の用例

Saddhp II 章における *upāyakauśalya* の用例を検証し、以下のように分類した。

2.1　如来たちが担う（べき）属性

upāyakauśalya とは、如来たちが担う（べき）属性のひとつである：

KN 29, 10 *mahopāyakauśalyajñānadarśanaparamapāramitāprāptāḥ śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhāḥ* /

「シャーリプトラよ、如来・阿羅漢・正等覚者たちは、偉大な方便の巧みさと知見との最高の極致に到達している」

3　増田［1971］は妙法華に「以是方便皆使發心漸漸増益入於佛道」に言及するが、n. 10でその対応 WT に「方便」に相当する語が存しないこと（WT 242, 17 *tathā ca deśeya tam artha-jātaṃ yatha śrutva bodhīya bhaveyu lābhinaḥ* //「彼ら［聴衆たち］がさとりを得ることができるように、そのように彼［釈尊］はその意味を示す」）や、n. 11で妙法華に「…方便…」に対して WT が ... *dharmaparyāya*...「法門」となっている箇所、n. 12で妙法華に「隨宜方便」とある箇所が *saṃdhāvacana* となっていることを指摘している。漢訳のみによっては、Skt. 原典における *upāya* (*-kauśalya*) のありようを知ることは困難といわざるを得ないことになる。

4　*upāyakauśalya* と同義語の KN II 103 *upāyakauśalam*; V 61 *upāyakuśalaḥ*; 187, 9 *upāyakuśalas* を含める。

5　雲井［1969］；増田［1971］；五島［1978］；Pye[2003] など。

6　平岡［2012］はこれまでの法華経成立研究を纏めているが、Saddhp II 章が最古層に属するとするものが大多数である。

恐らく、このように n. sg. で用いられる場合、「方便の巧みさ」「善巧方便」という意味の抽象名詞であり、ブッダ･如来が備える属性をいう。上例のほかに以下がある：

KN II 99 *upāyakauśalyam anantu teṣāṃ bhavisyati lokavināyakānām /*
yena vineṣyant' iha prāṇakoṭyo bauddhasmi jñānasmi anāsravasmin //99//

「限りのない *upāyakauśalya* が彼らには、あるだろう世間を導くものたちには。この世で（*iha*）、千万の生物（*prāṇa-*）たちを導くであろうことによって、ブッダに属する（*bauddha-*）無漏（*anāsrava-*）の智慧（*jñāna-*）について。」

2.2　具体的な形態

upāyakauśalya の具体的な形態は多様である：

KN II 129 *upasaṃkramitvā ca mamaiva antike kṛtāñjalīḥ sarvi sthitāḥ sagauravāḥ /*
yehī śruto dharma jināna āsīt upāyakauśalya bahuprakāram //129//

「そして［彼らは］他ならぬ私の傍に近づいて、皆（*sarvi*）合掌していた、敬意を抱きつつ（*sagauravāḥ*）―その彼らによって（*yehī*）、勝利者たちの法が聞かれたのであったが。*upāyakauśalya* は多様である。」

2.3 「ことば」によって法を説き・明らにする機能・手法

upāyakauśalya は「ことば」によって法を説き・明らにする機能・手法である。とくに pl. で用いられる場合は、*upāyakauśalya* の個々の形態は、諸々の発話行為を意味するものと思われる：

KN 29, 8 *vividhopāyakauśalyajñānadarśanahetukāraṇanirdeśanā-*[9]*rambaṇanirukti-*
prajñaptibhis taistair upāyakauśalyais tasmiṃs tasmiṁl lagnān sattvān
pramocayitum /

「さまざまな *upāyakauśalya*・知見（*jñānadarśana*）・原因（*hetu*）・理由（*kāraṇa*）・説明すること（*nirdeśanā*）･根拠（*ārambaṇa*）･語源解釈（*nirukti*）･手引き（*prajñapti*）たちをもつ、そうした個々の（*taistair*）*upāyakauśalya* たちによって、あれこれに執着した衆生たちを解脱させるために（*pramocayitum*）。」

ここでは知見・原因・理由 ... 語源解釈等を列挙し、それを *taistair upāyakauśalyais* と受けている。*upāyakauśalya*は、ここでは「ことば」による説明が意図されているものと推察される。以下の箇所では、ブッダ（＝指導者、如来）が諸々の*upāyakauśalya*を用いて法を説くと明瞭に示されている：

KN II 72 *sarvehi tehi puruṣottamehi prakāśitā dharma bahu viśuddhāḥ /*
dṛṣṭāntakaiḥ kāraṇahetubhiś ca upāyakauśalyaśatair anekaiḥ //72//

「そのすべての人間の中の最優秀者たちによって、多くの完全に清らかな（*viśuddha-*）法が顕し出された。実例（*dṛṣṭāntaka-*）たちと原因・理由たちによっ

て、幾百の *upāyakauśalya* たちによって。」

KN II 42 *śṛṇoti me śārisutā yathaiṣa saṃbuddha dharmaḥ puruṣottamehi /*
yathā ca buddhā kathayanti nāyakā upāyakauśalyaśatair anekaiḥ //42//

「シャーリスタ（*śārisutā*）よ、私から聞きなさい。この法が人間の中の最優秀者（*puruṣottama-*）たちによってどのように完全にさとられたのか。そして、ブッダ・指導者たちがどのように物語る（*kathayanti*）のかを。幾百の *upāyakauśalya* たちによって。」

ブッダ・如来たちが「物語る（*kathay-*）」という用語が用いられていることからも、*upāyakauśalya* は「ことば」を媒介とすると考えられよう。

仏教は釈尊のさとりにはじまった。その深い内容が凡夫に理解しがたいと考えた釈尊は説法を躊躇した[7]。この後、梵天が釈尊に三度懇願し、釈尊は自身のさとり得た法を理解する機根をもつ人々のために、この法を説こうと決意する。そして、サールナートへ赴き最初の説法をすることとなる。当然、この説法内容が「ことば」によって伝えられたのである。釈尊の説法が理解しがたいことは Saddhp にも同様の記述がある：

KN 39, 10 *durbodhyaṃ śāriputra tathāgatasya* [11]*saṃdhābhāṣyam / tat kasya hetoḥ/*
nānāniruktinirdeśābhilāpanirdeśanair mayā śāriputra vivi-[12]*dhair*
upāyakauśalyaśatasahasrair dharmaḥ saṃprakāśitaḥ / atarko 'tarkāvacaras
tathāgatavijñeyaḥ śāri-[13]*putra saddharmaḥ /*

「シャーリプトラよ、如来の*saṃdhābhāṣya*はさとりがたい。それはなぜなら、種々の語源解釈・説明（*nirdeśa*）・表現（*abhilāpa*）・説明すること（*nirdeśanā*）をもつ、私によって、シャーリプトラよ、さまざまな百×千の*upāyakauśalya*たちによって、法が完全に顕し出される（*saṃprakāśitaḥ*）。正しい教えは、シャーリプトラよ、思索がなく（*atarko*）、思索の領域になく（*'tarkāvacaras*）、如来［だけ］が識別できるから。」

釈尊の教えは、あくまでも「ことば」を介して伝えられるべきものだろう。上掲箇所には *saṃdhā* なる「ことば」であると明示されている。

upāyakauśalya は、ブッダ・如来が持つ能力であり、真理を開顕する方法である「ことば」の巧みさであるといえよう[8]。その「ことば」とは如何なるものであろうか。それを解明する鍵は、上例に見える *saṃdhābhāṣya* の正確な理解にある。

7　梵天勧請説話の出典箇所は阪本（後藤）［1992］、この説話の研究史は原［2006］を参照。
8　下田［1999］84は「『法華経』において、「方便」は真理を「ことば」として現わし出す方法、能力である」と指摘している。

3　*saṃdhābhāṣya* と *upāyakauśalya* との関係

saṃdhābhāṣya-[°*vacana*- / °*bhāṣita*-] は『妙法蓮華経』では「隨宜所説」「隨宜説法」などと漢訳される。Saddhp中に14箇所在証され、最重要用語の一つとしてしばしば検討対象となってきた[9]。先行研究の解釈は、おおよそ次の4つに分類できる：

(1)　チベット訳法華経を参考にした訳語[10]

(2)　*saṃdhābhāṣya* の *saṃdhā* を *sandhāya*（*saṃ* √ *dhā* の絶対詞）の短縮形（*-ā-* ＝*-āya-*）と解釈し **sandhāya bhāṣya-* と理解した訳語[11]

(3)　*saṃdhābhāṣya* の *saṃdhā* を f.（「意図」「一致」「合意」「言質」「誓願」などの意味[12]）と解釈し *saṃdhā* と *bhāṣya-* の複合語とした訳語[13]

(4)　以上の(1)–(3)の所論を参考にしたと考えられる訳語[14]。

本稿執筆者は以上に関わらず、結論的には以下のように考える[15]：*saṃdhābhāṣya* は Saddhp に特有な用語である。*saṃdhābhāṣya* の *saṃdhā* は、*saṃ* √ *dhā* の語根名詞（「考え合わせること」「組み立てること」「構成すること」の意味）ととるのが適切である。例えば Saddhp 29, 7f.（II 144）を本稿執筆者の見解に従って解釈してみよう：

KN II 144 *etādṛśī deśana nāyakānām upāyakauśalyam idaṃ variṣṭham* /

$^{+}$*bahūhi saṃdhāvacanehi coktaṃ durbodhyam etaṃ hi asikṣitehi* //144//

「指導者たちの教説（*deśanā*-）は、このようなものである。これは最も望ましい *upāyakauśalya* である。そして、多くの[16]［*upāyakauśalya* を］構成することば（*saṃdhāvacana*-）たちによって語られている（*uktaṃ*）。それはさとり難いものだ、学んでいない者たちにとっては。」

ここに見るように、「最も望ましい*upāyakauśalya*」は多くの「［*upāyakauśalya*を］構成する『ことば』たち」によって語られる。

個々の「ことば」は、個々の意味を指すように適切に発話されなければならない。

9　*saṃdhābhāṣya* の研究史については久保［1987］を参照。

10　例えばBURNOUF[1852]「秘密のことば」; EDERTON[1937] ‘“speech, words” in the sense of “complete, comprehensive, (and so) fundamental, essential meanings”’「『完全な、包括的な（それゆえに）根本的な、本質的な意味』という意味での『ことば、語彙』」など。

11　BHATTACHARYA[1928] ‘intentional speech’「意図して説かれた」など。

12　PW 640：*saṃdhā*, f.

13　KUBO[2007] ‘purposeful wording’「意図をもつことば」; MONIER-WILLIAMS[1886] ‘n. allusive speech (cf. *saṃ-dhāya*)’「引喩を用いたことば」など。

14　苅谷［1983］「ある意図に基づく所説」; 下田［1995］78「意味を秘めて語られた言葉」など。

15　参照、西［2014］。

16　$^{+}$*bahūhi*: KN *bahūni*のままでは文章にならない。SMSR 459によると、31写本のうちPk, C4, C5, N1: *bahūhi*; C3: *bahū*; D2, D3: *bahūbhi* で、それ以外は *bahūni* である。本稿では Pk, C4, C5, N1, WT 58 n. 2の読みに従い *bahūhi* と読んだ。

正しい「ことば」たちが正しい文を構成し、理解すべき内容を人に正しく理解させるだろう。このとき、構成（いわば「設計」）を誤れば、相手に正しい理解も得られない。ブッダ･如来はこの「ことば」たちの構成方法を過誤なく備えていることになる。

４　おわりに

本稿の Saddhp II 章の *upāyakauśalya* の検証は、下田［1999］が言う「『方便』は真理を『ことば』として現わし出す方法･能力」との見解に一致する[17]。そしてその「ことば」は、仏説を人々に理解させるよう適切に構成されなければならない。

仏説は甚深微妙で知り難い。これを理解しようと数百年に亙って累々と仏教文献が撰述されてきたが、仏説が「ことば」で表現しがたいためであろうか、釈尊が弟子に仏説を教えるのに神通を用いる例が現れた[18]。時には人々は、この理解の障壁を神通･瞑想等で解決しようともする[19]。

しかし敢えて、ブッダが「ことば」によって宣布したように―彼がそうしたということは、仏説は「ことば」によって伝えることができるということだから―「ことば」で仏説を再話することを試みよう、というのがSaddhpの意図ではなかったかと考えられる。仏説は一語で、二語で…一文で言い尽くされるものではない。それゆえ、適切にブッダ・如来の意図・意義を示すように構築された多くの「ことば」によって物語る必要がある。それが Saddhp に特有な用語 *saṃdhābhāṣya* である。

本稿では Saddhp II 章の範囲に限定して *upāyakauśalya* を検証した。Saddhp 全章にわたる *upāyakauśalya* の意義・特徴、Saddhp 写本や KN についての諸問題、また Saddhp が「ことば」で仏説を再話することを意図するなら、空思想を基調とする最初期仏教経典とされる『般若経』の意図とアンチテーゼの関係にあると考えられることなどについては、今後の研究に期したいと考えている。

【参考文献】

(1)　鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』、『大正新脩大蔵経』第9巻法華部全・華厳部上［普及版］、1988年　1-62。

17　下田［1999］84。

18　例えば河﨑［2014］を参照。Saddhp VII章に神通による *upāyakauśalya* の一例が以下に見られる：KN 189, 4 *caiṣām evaṃ kathayatīdaṃ khalv ṛddhimayaṃ nagaram iti / evam eva bhikṣava-*[5]*s tathāgato 'py arhan samyaksaṃbuddho mahopāyakauśalyenāntarā dve nirvāṇabhūmī sattvānāṃ viśrā-*[6]*maṇārthaṃ deśayati saṃprakāśayati* /「そして彼らにこのように物語る。『神通でできた都城なのだ』と。まったく同じように、比丘たちよ、如来・阿羅漢・正等覚者もまた偉大な *upāyakauśalya* によって、途中で2つの涅槃の境地を示し、顕し出す」。

19　例えば Saddhp における瞑想については Nishi[2011] を参照。

⑵　雲井［1969］：雲井昭善「方便と真実」、横超慧日編著『法華思想』、平楽寺書店、1969年　321-351。
⑶　増田［1971］：増田英男「法華経における『方便』の意味について」、『密教文化』95、密教研究会、1971年　61-70。
⑷　五島［1978］：五島清隆「法華経に見る方便思想」、『東洋学術研究』92、1978年112-137。
⑸　苅谷［1983］：苅谷定彦『法華経一仏乗の思想』、東方出版、1983年　89。
⑹　日下［1985］:日下俊文「法華経における方便思想」、『西山学報』33、京都西山短期大学、1985年　1-20。
⑺　久保［1987］：久保継成「『法華経』における *saṃdhābhāṣya* の語意について」、『法華経菩薩思想の基礎』、春秋社、1987年　30-44。
⑻　下田［1999］：下田正弘「「梵天勧請」説話と『法華経』のブッダ観－仏教における真理の歴史性と超歴史性」、『中央学術研究所紀要』第28号、1999年　69-99。
⑼　阪本（後藤）［1992］:阪本（後藤）純子「『梵天勧請』の原型」、『印度學佛教學研究』41（1）、1992、474-478。
⑽　原［2006］:原實「梵天勧請の類型」、『国際仏教学大学院大学研究紀要』10、2006、204-172。
⑾　平岡［2012］：平岡聡『法華経成立の新解釈－仏伝として法華経を読み解く－』、大蔵出版、2012年。
⑿　西［2014］：西康友「法華経における *saṃdhābhāṣya* なる用語の再検討」、『宗教研究』別冊87、2014年　325-326。
⒀　河﨑［2015］:河﨑豊「南方上座部における善巧方便」、『中央学術研究所紀要』44、2015、149-164（本紀要所収）。
⒁　BURNOUF[1852]：E. BURNOUF, *Le Lotus de la Bonne Loi*, *2 Vols*., Librairie Orientale et Americaine, Paris 1852, 19.
⒂　MONIER-WILLIAMS[1886]：M. MONIER-WILLIAMS, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford University Press 1886, 1144.
⒃　BHATTACHARYA[1928]：V. BHATTACHARYA, ‘Sandhābhāya Bhāṣa’ , *The Indian Historical Quarterly*, *Vol. IV*, 1928.
⒄　EDERTON[1937]：F. EDERTON, “Buddhist Sanskrit *saṃdhā, saṃdhi*（*-nirmocana*）”, Journal of the American Oriental Society, Vol. 57, 1937.
⒅　PYE [2003]：M. PYE, *Skilful Means*, *A Concept in Mahayana Buddhism*, *Second Edition*, Routledge, London and New York, 2003.
⒆　KUBO[2007] ： T. KUBO, “The Buddha’s Attitude toward Communication with People as Depicted in the Lotus Sutra: Saṃdhābhāṣya”, *Journal of Institute for the Comprehensive*

Study of Lotus Sutra（*Hokke Bunka Kenkyu*）*Vol. 33*, 2007, 83.

⑳ NISHI[2011]：Y. NISHI, "Zen Buddhism in *Saddharmapuṇḍarīka*", *the Bulletin of Chuo Academic Research Institute No. 40*, 2011, 138–146.

【略　号】

acc.　accsative.

C3　MS. Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge（SMSR掲載Saddhp写本）.

C4　MS. Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge（SMSR掲載Saddhp写本）.

C5　MS. Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge（SMSR掲載Saddhp写本）.

D1　MS. Serial No. 45, National Archives of India, New Delhi（SMSR 掲載 Saddhp 写本）.

D2　MS. Serial No. 44, 45（RL No. 3031, 3032）, 47, 49, National Archives of India, New Delhi（SMSR 掲載 Saddhp 写本）.

f.　feminine.

KN　H. KERN and B. NANJIO eds., *Saddharmapuṇḍarīka*, *Bibliotheca Buddhica X*, St. Pétersbourg 1908–12（『ケルン・南條校訂本』）.

n.（No.）　notes.

n.　neuter.

N1　MS. No. 4/21, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū（SMSR掲載Saddhp写本）.

Pk　MS. No. 0004, held in the Nationalities Culture Palace, Peking（SMSR掲載Saddhp写本）.

pl.　plural.

PW　O. BÖHTLINGK und R. ROTH, *Sanskrit-Wörterbuch*, London 1855–1875, rpt. Delhi 2000.

Saddhp　*Saddharmapuṇḍarīka*（梵文「法華経」）.

SMSR　Z. NAKAMURA, K. TSUKAMOTO, R. TAGA, Y. KURUMIYA, Z. ITO, K. MITOMO, R. MITOMO and Y. KAWAZOE eds., *SANSKRIT MANUSCRIPTS OF SADDHARMA-PUṆḌARĪKA*, *Collected from Nepal*, *Kashmir and Central Asia*, Romanized Test and Index, Compiled by Institute for the Comprehensive Study of Lotus Sutra, Rissho University, Published by Publishing Association of Saddharmapundarika Manuscripts Vol.II, Tokyo 1988.

sg.　singular.

WT　U. WOGIHARA and C. TSUCHIDA eds., *Saddharmapundarīkasūtram, Romanized and Revised Text of the Bibliotheca Buddhica Publication by Consulting a Sanskrit MS. and Tibetan and Chinese Translations*, Tokyo 1934–5.

【謝　辞】

逢坂雄美氏（仙台高等専門学校名誉教授）、笠松直氏（仙台高等専門学校准教授）、河﨑豊氏（大谷大学総合研究所特別研究員）の諸氏から本稿に多くのご教示を頂いた。心から感謝申し上げる。